製品化・実用化事例	共同研究 人材育成 設備使用 技術相談

笠間長石シリーズの製品化支援

支援先

有限会社常陸窯いそべ陶苑
関雄太

【支援の背景】

笠間市で産出される稲田石を笠間焼原料として利用することをめざし、令和３～４年度に笠間焼協同組合と共同研究を実施しました。これにより、稲田石微粉末を使った新原料「笠間長石」が販売にいたりました。さらに、笠間長石を用いた笠間焼を「笠間長石シリーズ」と名付け、販売促進のための活動を行っております。

組合員である笠間焼作家などが笠間長石シリーズに取り組み始めたこともあり、数多くの製品開発を支援しております。ここでは代表的な事例を２つ紹介します。

【支援内容】

図１　笠間長石ブロンズ釉植木鉢

＜製品化事例①　(有)常陸窯いそべ陶苑（磯部祐介）＞

磯部祐介氏は、令和３年度共同研究に参加した笠間焼作家のひとりで、産地内原料である笠間長石に魅力を感じ、早い段階から試作や製品化に積極的に取り組んできました。

今回は、笠間長石の特徴を活かしながら金属の様な光沢を持つ植木鉢用釉薬の開発を目指しました。釉薬原料の配合比や焼成などの製造条件について検討を行いました。ブロンズ釉と呼ばれる釉薬に笠間長石を使用することで、独特の光沢や発色を持つ釉薬を開発することができました。現在、この釉薬は植木鉢（図１）だけでなく、食器販売もされております。

図２　笠間長石チタンマット釉マグカップ

＜製品化事例②　関雄太＞

令和４年度に独立開業準備中であった関雄太氏は、陶芸家として本格的な活動を始めるに当たり、笠間長石を主原料に、チタンマット釉（釉薬表面にチタンを含む微結晶を析出させた釉薬）で様々な発色の釉薬の開発を目指しました。そこで、陶芸技術者専門研修を受講し、釉薬開発のためのノウハウを習得するとともに、目的とする釉薬の開発を行いました。この研修により、白・ベージュ系発色のチタンマット釉（図２）や、そこから派生した薄青色・薄緑色・薄ピンク色の釉薬を得ることができました。新進作家陶芸展 2023（笠間工芸の丘、R5.4.26～5.28）において、これらの釉薬を用いた製品の販売を開始しました。

基礎となった事業	令和３～４年度　オンリーワン技術開発支援事業（共同研究） 令和４年度　陶芸技術者専門研修（総合科目） 令和３～５年度　維持運営費（設備使用、技術相談）				
担当グループ	窯業技術Ｇ	グループ長	寺門	秀人	TEL:0296-72-0316
		主任研究員	吉田	博和	
		会計年度職員	小林	真弓	
	陶芸人材Ｇ	グループ長	尾形	尚子	
		会計年度職員	根本	達志	
		会計年度職員	新島	佐知子	